

序

街を散歩していると、時に曲がってみたい街角や路地などに出くわす。何処へ行こうという目的があるわけではなく、その道の先に何かがありそうだというかすかな期待だけが足を導くのである。そこには意外な発見があることもあれば、ただの行き止まりの袋小路であったり、何の変哲もない所であったりすることもある。このような経験は誰にもあろうが、動機は単なる気まぐれか好奇心によることが多い。しかし大げさに考えると、人間の未知なものに対する憧れと言ってよいのではなからうか。たとえばこれと似たような行動では、犬などの小動物が自分の生活領域あるいは縄張りの隅々まで点検して廻っているのを見ることがある。恐らく自分の生活の場が安全な所かどうか異常の有無を確認し、他の動物に対してはその主権を主張しているのではあろう。人間の場合もこうした動物的習性の名残りとして徘徊時の行動を説明できなくもないが、知ることによって得られる安心が単に日常生活の場に留まらず、より形而上的な意味合いをもつようになった所に人間文化の特徴があるのではなからうか。

未知なものに対する怖れと不安はそれを知ることによって喜びと安心を得ることを覚えた人間は知ることに対する限りない営みを始めることになる。しかし知ることによってエデンの園を追われたアダムとイブはその末裔に至るまでさまざまな苦しみを味わねばならなくなったのである。知ることによって賢くなった人間はまた新しい怖れと不安のあることを知るのである。下世話な例では、複雑な事情は知れば知る程、難しくなることも多く、知り過ぎたために悩み、知ればこそ腹立しいことも起るのである。そこに「知らぬが仏」という概念も生まれる。なまじ知るより知らない方が悩みは少ないことを言っているのであるが、人間は悩み多く知る方を選んだのである。飽くことなく知ることを求め、安心を確かめる傍で新たな不安を作り出して行くのである。そして実はこれが人間文化の尽きぬ生命なのである。

未知な事象の究明が研究の基本的役割とすれば、研究活動が盛んである程、未知の世界を広げて行くようなものであり、ある意味では研究者は新しい文化の担い手として常に不安の創出を心がけていなければならないということにもなる。よく研究は終わった時に始まると言われる。新しい不安が見つかるのである。考えてみると、研究とは余りに人間的な因果な精神活動と言えるのではなからうか。

1987年4月

清水建設㈱技術研究所長

工学博士 太田利彦